

フクニチ新聞 9<sup>th</sup>. Aug. 1976

### しあわせになる絵

九州の美術界で一番の“人気者”といったら、桜井孝身さんではないかと思う。

その桜井さんが個展を開いている。(25日まで、福岡市中央区大名2丁目、西鉄グランドホテル前、斉藤ビル3階、福岡画廊)

作品の不思議さを作品に即してみよう。「太陽と鳥と少女」という絵は大小三十人の赤い体をした裸の人物がバンザイでもしているように両手を上げている。空には太陽が四つもあり、飛行船のような雲が六つ浮いている。雲にはそれぞれ何人かずつが分乗している。画面の右側に白い鳥が飛んでいる。

これは桜井さんの描き出したパラダイスなのだ。このごろはパラダイスという言葉も安直になってしまっていてレジャーセンターの代名詞に使われたりするが、桜井さんの世界は決して深刻ではないけれども、人間が何をささえに幸福を得るかという真剣な問いかけをはらんでいる。健康なこと、すべての人と仲のよいこと、大きく胸を張って生きていくことの喜びを明快卒直にうたい上げているのだ。これは桜井さんの絵の思想であると同時に、世界中を旅し続けていく桜井さんの行動の思想でもある。

現代の芸術がテクニックの上ではさまざまな様式を開発しながら連想的には疲れきっている現状と見合わせるとき、桜井さんが全生活を賭(か)けて求める幸福の思想のみごとな健康さが生き生きと訴えかけてくる。

ただ見落としてならないのは桜井さんの思想の背後には非常に複雑なものが秘められている点である。作品にしばしば登場する男の像はキリストによく似ている。だが、キリストはいつも一人ではない。“神御一人”といった存在ではない。隣人友人すべてがキリストであり、マリアであり、仏教ふうにいえば如来であり観音さまである。そこには現代の汎神(はんしん)思想の大胆な展開がある。この明快な思想的獲得に至るまで桜井さんは人にはいえないほどの苦しみを経てきている。桜井さんの絵が単純明快なように見えて奥行きにただならぬ深さをはらんでいるのは、こうしたいきさつも含んでいるからに違いない。